

現代日本の反レイシズム運動における動員＝参加の論理とジェンダー

清原 悠（東京大学大学院学際情報学府博士課程／
日本学術振興会特別研究員（DC2））

2000年代以降、日本でも「在日特権を許さない市民の会」（以下、在特会）に象徴されるような現代型の排外主義・レイシズムの動きが表面化した。昨年の2013年はそれらに街頭で直接対峙する「カウンター活動」が初めて大規模化に立ちあがった点で注目に値する年であった。反差別を表明するカウンター活動には2月に組織的にカウンター活動をする「しばき隊」の結成を端緒に、組織されていない人々も自由に参加でき、排外主義とは対極の友好メッセージを可視化/明示化する「プラカード隊」といった活動も存在する。これらの活動はエスニック・マイノリティへの排外主義デモへのカウンターとして立ちあがったものだが、ヘイトスピーチ・ヘイトクライムはエスニシティ以外の社会的に劣位に置かれがちな属性を持つマイノリティに行われることも珍しくない。日本でも反レイシズム運動にはジェンダーの問題に関わる活動をしてきた人々も参加しているが、それは以上のような問題意識をカウンター参加者も持っているからと思われる。特に、排外主義・レイシズムの運動の側には男性のみならず女性の参加者もあり、カウンター活動の側でもこのような女性のレイシストに対応するために、女性を中心にしたカウンター活動も形成されるようになった。本研究では、カウンター側における「ジェンダー」という要素がどのように運動において表れているのかを検討することを目的にし、その為にカウンター運動参加者（特に女性の参加者）への聞き取り調査を行った。

調査の過程で見えてきたのは、2013年以降の反レイシズム運動が基本的に「個人主義」の強い運動として形成されているという点である。すなわち、マジョリティたる日本人参加者は、まさに「日本」の問題への対処としてカウンター活動に参加しており、マイノリティの為にカウンター運動を行うという意味付け（フレーミング）を戦略的にしていないことである。それは多くの人を運動へ動員するため、例えば「日本と在日コリアンの歴史」を知らずともカウンターに参加できるように、マジョリティ/マイノリティという要素を潜在化させるという「個人主義」に立脚した戦略であった。このような戦略はジェンダーと言う要素においても関連して表れており、カウンター運動が立ち上がった当初には参加していたが、途中で離脱していくフェミニストもいた一方で、フェミニストを自認しながらも運動のなかに留まり続けた参加者も存在する。それは「運動」や「政治」をどのように見なすか、「連帯」というものの中味/形態の捉え方の違いに由来している。当日は2013年を中心に排外主義とカウンター活動の展開を時系列で紹介しながら、その参加（あるいは離脱）の要因と、運動全体のフレーミング、ダイナミズムとの相関をジェンダーという要素を軸に報告する。

文献

- McCarthy, J. D. and M. N. Zald, 1977, "Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory," *American Journal of Sociology*, 82(6), 1212-41.
Aisha K. Gill and Hannah Mason-Bish, 2013, "Addressing violence against women as a form of hate crime: Limitations and possibilities," *Feminist Review*, 105, 1-20